

短篇小説 1

ポカリスエット

川上未映子

「ポカリスエット買ってきて」。わたしはうんと返事して、自転車をこいでコンビニへと急ぐ。そして、今日も彼に抱かれながら「名前のないもの」について考える。

そうだ、そうだったわたしが、言ったんだ。なんとなく、もうつけなくていいですと、たしか初めの日からそんなに時間も経っていないのに、なんとなくそう言って、しまつて、それからずっと、もうこれが当然というふうに、こういうことになったのだった。いつのまに、こんなことになったのだろう。なぜ、こんなことになってしまったのだろう。されながら、なんだかよくわからなかったけれど、それはわたしが申しでたわけで、それで、それから、こうなっているわけで。

そのきっかけのやりとりを思いだしたとき、喉のあたりがいつしゅんぽわんと明るくなったのがみえたような気がした。なぜ喉のあたりが明るくなって、薄い闇のなかに浮かびあがつて、そこだけが自分であるように、そんなふうに、思ってしまうんだろう。手も動くし足も動かし、息だつてしてるし、なによりわたしはいま性交の最中なのに、たしかなものは、喉しかない、どうしてそんなふうに思ってしまうのだろうか。いつも、いつもだ。ほんやりと肌色に発光する喉しか世界にはもう残されていないような、そんな気持ちになってしまう。見慣れてると見慣れてないの中間くらいで満ちている、ふとんの匂いや、いつまでたつても動かない天井のしたで、いつもいつも、そんな気がしてしまう。

彼が動くのにあわせてやってくるいろんなものには名前がない。名前がないから、気持ちいいという言葉とか、息をつなげて、くりかえす。名前がないものは、どうやって呼んでいいのかかわからない。わからないから、名前じゃないものばかりがくりかえす。わたしが彼にさわっているのはた

ぶん性交をしているときだけだから、それは隠れているのによく似てる。草のたくさん生えたどこにでもある空き地のどこか、どかんみたいな大きなものの陰に隠れて隠れながら、なんのために、隠れているのか、隠れながらにわからなくなつて、そうしていると、どかんは土のなかにあるのが本当なのに、なぜ土のうえに出ているの。そのことまでが不安になつて、いつまで隠れていければ、いいのだろう。探してくれる人がいなければ、隠れていてもしかたがないのに、押しつぶされそんな心細さで、探す人を探すような、そんな夕方によく似てる。

彼はいつも、わたしのくりかえすものにたいしては、そう、としか漏らさない。ほかには、へえとか。あとは無視。それは、性交のとき、彼にやってくるものにも名前がないせいなのか、どうなのか。たんにうんざりしているだけなのか、それともその両方なのか、あるいはまったく違う理由からなのか。わからないから、瞬きがふえる。瞬きは、名前からこぼれるものを、ていねいに吸いあげてくれるので、少し助かる。瞬きはまるで、顔についた羽のようで、まぶたは風をうまく抱く。気がつくとなわたしはふとんから数センチ、浮かびあがつていて、数分後にはいつも部屋のすみ、天井の角にはりついて、そこから彼とわたしを眺めてる。

薄い闇の青さのなかで、さつきからほんやり光っているわたしの喉は地図みたい。かほせい線で区切られた、紙のうえの国みたい。それから、うんと小さなころ、やぶれないよう息をひそめてめくつてもらつた、皮膚みたい。それはまだ若かつた母親の、けんこう骨から日焼けのせいではがれ